

文化財は知れば知るほど先人の英知が詰まった「宝の山」です。人間の生き方に対しても大きなインパクトをもっている点でコンピュータで哲学的でもあります。文化財との対話を通して、少し視点を変えさせれば、そこから泉のごとくあふれ出る先人の英知を聞き出せるのです。制作当初の思想や、



吉備国際大教授
白井洋輔氏

美意識さえ知ることが出来るのです。

◆「修復」は発見の手
ヤンス

当然のことですが、文財を「修理する」というのは、固い秘密のペールを剥がす千載一遇のチャンスでもあります。これまででは、携わった職人が知っていただけでも知りません。あるいは気づくことなく覆い隠してしまっ

て、未来未訪問の中というところもあったはずですが、しかし修理という点に、さまざまな研究者は、実に大きな疑問が可

文化財を現代に生かす

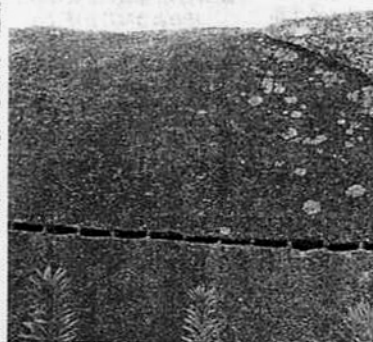
能となります。そこから、より文化財というものを大切にしなければならぬという保護運動にもつながり、修復方法に関しても、最高のものが現れるはず。そして何より先人から私たちへ、そして次代へ系統性をもって確かな生き方を脈々とつなげていくことが出来

◆異業種連携で広がる可能性
将来は文化財のあらゆる種類の修復技術者を吉備国際大の文化財総合研究センターと結んで、異業種の情報移動、伝達をスムーズに行えるようにしたいと思っています。そこ

で蓄積されたものは、文化技術史に関するデータベースと「文化財」の結合で輝くものとなること

生命科学であれ、天文や宇宙工学であれ、時代のすう勢は共同研究にシフトしていることが分かります。それは崇高な

岡山市大久保にある「鳴き岩」。石を一直線に切るには、ミシン縫穴のまんなかに楯のくさびを打ち込み、水を掛けると、木が膨張して鋭い石を割ることができると、石彫削技術。桃山時代のハチク技術だ



理念を核とした上で、垣根を取り払って、機軸性を持つ大きなプロジェクトの運用によってのみ得られる成果があるから

改めて文化財に対して、その中に隠された英知を可能な限り掘り起こし、技術史的なもの、時代の変化と技術の関係、新技術として応用可能なものを考えるのです。さらに、アタックの仕方を広げ、改めて人間の技術とは、進化とは何か、何が技術を生みさせていく原動力なのかを絶えず考え続けるのです。

修復の立場や過程で取り出す者、分析で徹底的に真実に迫る者、各資料間で対比させる者、国際的レベルで検討する者、それぞれで相と一つの目標の中で、再統合を試みます。そうすることで、今まで誰も手がつかなかった領域に、何が浮かび

上がるはず。◆素晴らしい日本の文化

その国が世界の中で本当に尊敬されるというところは、決して経済的に豊かであるとか、軍事力で他を圧倒しているとかではないのです。それは文化化においてのみであるというのを忘れないでほしいと思います。日本は非常に素晴らしい先人の英知や考えを文

化財という中にゆっくりとエッセンスのように結晶させてきた文化国家であり、たかたか忘れたことありません。日本の文化をひも解くことは日本のためだけではありません。不安と希望の間で揺れ動く人間はもとより、世界が無機質的に殺伐とすればするほど、人や社会をパランスを取りながら豊かにするようになるはず



お菓子のパックも、開封しやすいように石彫削技法と同じ技術が応用されている